



メイプル村のサラ



kkamiyam

メイプル村から歩いて一時間、サリアナ湖のほとりにある草原があたしの仕事場兼、憩いの場だ。

朝、日の出前に起き出して村の共同牧場から羊を連れ出し、湖へと向かう。道中――あたしはその道のことをせせらぎ小径と呼んでいた。何故ならば、道に沿って小川が流れていたからだ――あたしは肩掛け鞆から黒パンを取り出して、それをかじりながら歩く。それと干した林檎とが、あたしのささやかな朝食だ。

せせらぎ小径をしばらく歩くと、やがて小川に架かる橋へと行き当たる。そこは丁度湖まであと半分ほどの距離のところだ。その橋の上から、あたしはやっと完全にその姿を現した太陽に向かって朝の挨拶をする。そうして、それが済むとあたしは再び湖に向かって歩き始める。

サリアナ湖に着くと、あたしは羊を放して草原にごろんと横になる。そして、色々なことを考える。それは本当に何気ない空想ごとだったり、ちょっぴり気取って人生のことだったり、とにかく様々なことを考えるのだ。そうして日がな一日をそこで過ごしたあと、羊たちをまとめてあたしは帰路へとつく。勿論、その他にもお父さんの食事の支度だとか山羊の乳を搾ったりだとか、すべきことは山ほどあるが、そんなことをいちいち話していたならばきりが無い。

そんなある日のことだった。あたしはいつものように草原に仰向けに寝転がって、ぼんやりと空を眺めていた。空はからりと晴れ渡り、ところどころに白い雲が浮かんでいた。

心地よい風が、さあっと草原を吹き抜けていった。

だが、そんなことは今のあたしにとってはどうでも良いことだった。

――結婚、か……

あたしはふと声に出して呟いた。

それは、今朝の出来事だった。あたしはいつもの通りに顔を洗って――それは真夏でも首をすくめるほどに冷たい井戸水だった――牧場へと出かけようとしていた。お父さんはもう少し経たないと起きては来ない。あたしはがらんとした家の中に向かって、行って来ますと囁いた。

と、そのとき部屋の中から声がした。

――サラ。

あたしは思わず振り向いた。こんな時間にお父さんが起きてくるなんて、滅多にないことだった。だが、戸口のところにはしっかりとお父さんの姿があった。

――サラ。

もう一度お父さんが呼び掛けてきた。

――何？ お父さん。

――お前もそろそろ良い年頃だろう。どうだ、ここらで一つ、良い人を見つけて一緒になったらどうだ。

あたしは一瞬どきとした。が、それを顔に出すことはどうにか抑えられたようだった。何でも無い風に取り繕って、あたしは――またお父さんたら、寝ぼけないでよ――と言うと、そのまま家を出てきたのだった。

風があたしの頬を撫でた。湖面がきらきらと、太陽の光を反射させた。

結婚.....か。あたしももう、そんな歳なのかな。ううん、そんなことはないわ。だって、あたしはまだ十六歳なのよ。結婚なんて早過ぎるわ。

でも、とあたしは考える。隣のマノイ小母さんだって十七の時には結婚していたって話しだし、あたしの友達のうちの何人かはもう既に婚約してしまっている。あたしももうそろそろ... ..いいえ、そんなことはないわって。あせることはないじゃない。まだ時間なんて、いくらでもあるのですもの。

でも、どうして今日に限ってお父さんたらあんなことを言い出したのかしら。どうして？

そういえば、ここ最近のお父さんは少し変だ。以前に比べて何だか気弱になっているみたい。それは、ある事件（ってほどのものでもないのだけれど）を境に起きたことだった。

お父さんは木こりだった。こんな言い方をすると今では違う職に就いているように聞こえるけれど、勿論それは違っている。今でも立派に仕事をしている、と少なくともあたしはそう思っている。

ある日のこと、お父さんたちは一本の木を切り出していた。それはここしばらくのうちでも最も立派な、という位のすらっとした素晴らしい木だったそうだ。お父さんは、その中でも切り出し頭という役目に就いていた。切り出し頭というのは木こりたちをまとめる偉い役目だ、といつかお父さんが話してくれたのを思い出す。と同時にそれだけ肩にかかる責任は重いのだぞ、とも。

とにかくお父さんの指揮の下、幹に一振り一振り斧が食い込み、やがて最後の一撃が加えられると木はゆっくりと倒れ始めた。が、そこで思いもかけないことが起こった。

誰もいない方へと倒れて行く筈だった大木は、何処でどう間違ったのか皆の見守っているところへと倒れてきたのだった。

皆は慌ててその場から逃れた。だが、二人ほど逃げ遅れた者たちがいた。彼らは怒号と悲鳴の響く中、大木の下敷きになった。

その日からだった。お父さんがすっかりと弱気になったのは。皆はお父さんの責任ではないと言ってくれた。完璧な指図で、何処にも落ち度はなかったとも言ってくれた。木が間違った方へと倒れてきたのは全くの偶然で、誰にも予測は出来なかったであろう、と。

それでもお父さんの気は静まらなかった。あたしも幾度となくお父さんのことを励ましたかしのれない。でも、その度にお父さんは不機嫌になり、酒を次々と飲み干した。いまではあたしはそっとしてあげておいた方が良くと思い、また実際にそうしている。

事故から二、三日たってから、お父さんはまた仕事に出かけるようになった。でもそれも、ただの木こりとしてだった。皆はまたお父さんに頭の役に就いてもらおうとしたらしい。だが、そればかりは頑として受け付けなかった。仕事の帰りには必ずといって良いほど酒場に寄るようになった。そして、ふらふらになるまでに飲んでから家に帰ってくるのだった。

と、こんなことをぼんやりと考えていると
――サラ。

とあたしを呼ぶ声がした。

体を起こさず、目だけを声のした方へとやる。そこにはマイクが立っていた。

――また空想ごとかい？

――ううん、違うわ。

もう、マイクったらあたしがこうやって寝転んでいるときには空想に耽っているとしか考えられないのかしら。まあ、確かにそのときの方が多いのだけれども。

――じゃあ、何だって言うんだい？

そう言って、マイクはあたしの横に腰を下ろした。あたしは黙って彼にちらりと目をやると、そのまま瞼を閉じた。

――ゼダさんのことか。

――そう。

目を閉じたまま、あたしは答えた。ゼダってというのはあたしのお父さんの名前だ。

――お父さん、早く元気になって欲しいのに。

――そうだね。

そのまま暫くの間、あたしたちは黙り込んでいた。

と、唐突に頭の中に先程の結婚という二文字が浮かんできた。

マイクは幼なじみで、あたしより二つ年上だった。いつもあたしに優しくしてくれ、そしてあたしたちは兄妹のように仲が良かった。けれども、今までに結婚なんてことを考えたことは一度もなかった。

それが今、あたしの頭の中には結婚というその二文字が浮かんでいた。マイクとだったら、彼とならば安心していられる。あたしのことを大切にしてくれるに違いない。

いいえ、違うわ。一体あたしったら、何を考えているのかしら。大体マイクはただの幼なじみよ。彼がお兄さんであたしは妹、ずっと前からそうだったじゃない。そしてこれから先も、ずっと変わらないのよ。結婚なんて、まだあたしには早過ぎるわ。

でも、でも……一度頭に浮かんだ考えは簡単には消えてはくれない。ぐるぐると、それはまるで無限の輪舞のようにあたしの頭の中を駆けめぐる。

違うんだったら！

思わず言葉が口をついて出そうになる。

――どうかしたのかい。

突然マイクの言葉が耳に響いた。そうだった。今、あたしの横には彼がいたんだわ。あたしってば、自分の考えに夢中になっていてすっかり忘れていた。

すると、今考えていたことが急にものすごく恥ずかしくなってきた。

顔にさあっと血が昇ってくるのが判る。だって、こんなに耳が火照っているのだもの。きっとあたし、今真っ赤な顔をしているのに違いない。

両手で顔を隠すと、あたしはマイクとは反対の方へと顔を向けた。

――おい、どうしたんだよ。サラ。

再び彼が声をかけてくる。

――……何でもないの。

一息ついて顔の火照りが収まってから、あたしはマイクの方へと振り向いた。彼はあたしのことを心配そうに覗き込んでいた。

いけない、マイクの顔をまともに見られない。どうしてもさっき考えていたことが頭の中に浮かんできてしまう。あたしはつと彼から目をそらして、湖へと視線を走らせた。

マイクは今度は何も言わなかった。そして彼も矢張り湖面を眺めているようだった。

――サラ。

マイクが口を開いたのは、どのくらいの時間がたってからのことだったのか。もしかしたら、五分とたっていなかったのかもしれない。

――何？

――いや……何でもない。

そして彼はまた黙ってしまった。あたしは何が何だか判らなかったが、その場の雰囲気には押されて何も言うことが出来なかった。

重苦しい空気が辺りに漂っていた。

――サラ。

再びマイクが口を開く。

――何なの。

――その……今、好きな人なんて……いるのかい？

それは唐突な質問だった。あたしは今まで好きな人のことなんて、考えたこともなかった。それが今、改めてマイクに問われて、突然あたしの頭の中は回転を始めた。好きな人。好きっていうのならば、マイクもお父さんもマノイ小母さんも、そしてもっともっと沢山の人がいる。ううん、違う。この場合の「好き」っていうのはそんな意味じゃないんだってば。もっときちんとかんがえなくっちゃ。でも変ね。どうしてマイクったら、突然こんなことを尋ねてくるのかしら。何故なの……？ ああ、また余計なことを考えている。マイクが応えるのを待っているじゃないの。ちゃんと考えなければ。

あたしは考えて、そしてまた考えた。好きな人。あたしにとって一番大切だと言える人。

でも、それは一体誰。誰なの？

きっとあたしは困惑した表情をしていたのだと思う。色々な感情が現れては消えて、そしてまた現れてを繰り返していたのだから当然と言えば当然なのだけれど。

――御免、サラ。

突然、マイクが謝った。

――誰にも言いたくないことだってあるんだよな。御免な、変なことを聞いたりして。

違う。そうじゃないの。ただあたしには、まだそんなことが考えられないだけなのよ。

暫しの沈黙のあと、彼は突然言った。

――僕はサラ、君のことが好きだ。

え、何？ 何なの、今マイクは何と言ったの？

あたしは一瞬彼に尋ね返そうとした。けれども、喉の奥に何かが詰まったような、何だかそんな感じがしてそれが言葉になることはなかった。

――ずっと前から、もう何年も前からサラのことが好きだったんだ。でも、そんな様子じゃもう他に誰か好きな人がいるんだね。

あたしは何も答えることが出来なかった。喋ることが出来なかった。

――よし、判った。

そう言って彼は立ち上がった。そしていつものように（もしかしたらほんのちょっぴりだけでも、苦しそうな表情も混ざっていたのかもしれないが、それはあたしの思い過ごしだろう）、本当にいつもと同じ笑顔をしていた。

そして、空を見上げると自分に言い聞かせているような口調で言った。

――僕は町へ行くよ。

――えっ？

あたしには彼の言っていることが判らなかった。

――僕は町へ行く。そして学校へ入学するんだ。もう先だってよりずっと考えていたことなのだけれど、君のことが気になってどうしても決心がつかなかったんだ。でも、今こそ決心した。僕は学校へ行く。そうして、卒業したらこの村へと戻ってきて学校を開くのだ。

あたしは何も言うことが出来なかった。彼の顔には強い、誰にも変えさせることの出来ない強い決意が満ち溢れていた。そんな彼に対して、一体何が言えただろう。

――サラ、変なことを言って悪かったね。でも、もう二度と言わないから安心してくれ給え。そうして、これからも良かったら僕と友達でいてくれないか？ もしそうしてくれるのならば、僕と握手をしてくれ給えよ。

そう言ってマイクは手を差し出してきた。あたしは立ち上がると、ただ黙って彼の手を握りしめた。

――そうか、友達でいてくれるのか。有り難う。それじゃ、僕はこれから色々と支度があるからこれで失敬するよ。

そして彼は、後ろを振り返らずにせせらぎ小径を村へと向かっていった。

彼が去ったあと、あたしは暫くの間呆然としていた。そして、気が付くとその場にへたりこんでしまっていた。マイクはあたしのことを好きだと言ってくれた。いつもは冗談を言い合っていた仲だったけれども、そのときの彼の目は真剣だった。そしてあたしは、あたしの方はどうかといえば、はっきり言って良く判らなかった。彼のことは確かに好きだ。大好きだと言えるほどに好きだ。でもそれが、妹としてお兄さんを慕う気持ちとしての「好き」なのか、それとも恋愛感情としての「好き」なのか、自分でも判らなかった。いいえ、判断を下してしまうことが恐かったのかもしれない。もう、何が何だか判らない。あたしは顔を覆うと、突っ伏してしまった。

と、先程のマイクの言葉が頭の中に蘇ってきた。僕は町へ行くって、彼はそう言っていなかったっけ？ マイクが街へ行く。村を出て行ってしまう。それが一体どういうことなのか、あたしは考えた。一心に考えた。彼があたしの前からいなくなる。今までにそんなことは一度たりともなかった。辛いときも、楽しいときも、いつだって彼はあたしのそばにいてくれた。あたしが落ち込んでいるときには励ましてくれ、泣いているときにはそっと肩を抱いてくれ、喜んでいるときには一緒になって心から喜んでくれた。そんな彼がいなくなる。学校を卒業してからまた村へと戻ってくるとは言ったけれども、それまでの何年か、彼と会うことは出来ないのだ。それは一体どんな気持ちになることだろう。

そのとき突然、あたしの頭の中で何かが弾けたような感じがした。

気が付けば、いつでもそばで見守ってくれていた人。あたしのことを優しく包み込んでいてくれた人。それがマイクなのではなかったっけ？

あたしにとって、一番大切な人。それが彼だったのだと、あたしは今初めて気が付いた。その彼がいなくなってしまう。それがどんなことなのかを考えたとき、あたしは眩暈を覚えた。

彼に町へなんて行って欲しくない。いいえ、行かせてはならないのよ。それは絶叫にも似たあたしの感情だった。

仕事が終わるまでの時間がこれほどもどかしいものだとは思わなかった。あたしは殆ど一分おきに、いらいらしたり、せつない気持ちになったり、終いには立ち上がって意味もなく辺りをうろついて回ったりした。

日が西に傾き始めると、あたしは大急ぎで羊たちを集めて村へと向かった。気は急ぐけれども羊たちの足取りは重くて、あたしにはそれがもどかしかった。

やっと村へと着いたのはいつもと同じ、太陽が地平線に接する頃だった。あたしは荷物を家の中に放り込むと、急いで――どうせお父さんは今夜も酒場に行っていることだろう――マイクの家へと向かった。

どろどろと、とあたしは扉を叩いた。少したつと中から声がして、扉がガチャリと開かれた。そこにはマイクのお母さんの姿があった。

――おや、どうしたんだい、サラ。

――マイクは、マイクは何処にいるの、小母さん。

――さあ、裏の井戸のところにもいるんじゃないかい？

あたしはそれを聞くと、殆ど走るようにして家の裏へと回った。そこには間違いなく、マイクがいた。

――マイク。

あたしは彼の背中に向かって、そっと声をかけた。マイクはちょっとびくっとすると、あたしの方へと振り向いた。

――サラ。

――どうしたんだい、こんな時間に。

――ねえマイク、ちょっと話したいことがあるのだけれども。

彼は何も言わずに桶を井戸端に置くと、あたしの方へと向き直った。

――さあ、これでいいだろう。一体何の用なんだい？

――町へ行かないで欲しいの。

きっとあたしの言葉があまりにも唐突だったのだろう。マイクの顔には一瞬、驚いたような表情が浮かんだ。

――それって、どういう意味だい？

――お願い、村に残って。このままあたしのそばにいて。

――おいおい、何を言ってるんだよ。サラには好きな人がいるんだろ。だったらその人のことだけを考えていればいい。けれど、僕たちは友達なんだ。そりゃ向こうから手紙をよこすくらいのはするよ。けど、友達ってのは必ずしも一緒にいなけりゃならないってわけじゃない。それに、学校を卒業したら僕はこの村へと戻って来るんだ。ほんの数年もすれば会えるじゃないか。そこに何か問題でもあるって言うのかい？

あたしはもう、我慢をすることが出来なかった。ただ黙ってマイクの胸に飛び込むと、彼に抱きついて叫んだ。

――違うの。そんなものじゃないわ。判らないの、あたしが貴方のことを好きだっていうことが。そうよ、あたしにとって一番大切な人がマイク、貴方なのよ。マイクはあたしの肩に手をかけて、何も言わずに黙っていた。彼がどんな表情をしていたのかは知らない。あたしは彼の胸に顔を埋めていたのだから。でも、彼が様々なことを考えているのだということは、手に取るように判った。

やがて彼はあたしのことをそっと抱きしめると、

――そうか、そうだったのか。

とだけ言った。

――そうよ、そうだったのよ。

あたしたちは抱き合ったまま、しばらくそのままだった。

沈んで行く夕日が、あたしたちを照らしていた。今、あたしはやっと自分の忘れていた、何か大切なものを見つけることが出来たような気持ちになって、何だかとても幸せ心持ちでいた。

――有り難う。

マイクが一言、そっと呟いた。

翌朝、マイクは町へと旅立った。あたしはそれを見送りながら、昨夜の彼の言葉を何度も心の中で噛み締めていた。彼は小川のせせらぎの間こえる草むらの中で、あたしに語ってくれた。

――いいかい、サラ。君が僕のことを好きでいてくれると判った今となったって、やっぱり僕の気持ちは変わらないよ。いや、むしろ好きでいてくれるのならばなおさら僕は町へと行く。そして、きちんと勉強をして学校を卒業し、そうしてこの村で学校を開くんだ。そうすれば、君と違って一緒になりやすくなる。君に苦勞をかけることも、なくなるものだと思うのだ。

あたしはその言葉を聞いて、何も言えなかった。彼があたしのことを本当に想ってくれている

ことが、その言葉の中に表れていることが痛いほどにあたしには良く判っていた。そして実際、そうした方があたしたち二人のためにとっても良いことが判っていた。マイクは以前から、読書や物事を考えたりすることが好きだった。だから学校へ行った方が、このまま村に留まって畑仕事をしたりするよりも彼の性に合っているであろうことは、あたしにも良く判っていた。

だから、あたしは彼の言葉に頷くしかなかった。ただ涙がこぼれ落ちてくるのは抑えることが出来なかった。

あたしはマイクの後ろ姿を見送りながら、何年かの後に彼の帰ってくる姿を想像していた。そのとき初めてあたしたちは一緒になることが出来るだろう。そして、そのときまであたしは待ち続けるのだ。マイクと、彼と共にあるあたし自身の思い出とを。

お父さんも、今はまだ駄目だろうけれども、いつかはきっと元に戻ってくれる、あたしはそう信じていた。

いつの日にか、何もかもが素晴らしいと思える日がきっと来るだろうということ。

風がさあっと、あたしの頬を撫でていった。

終わり